

## 令和4年度 奈良市立神功こども園 研究実践概要

園長名 馬路 有理

全園児数 144名

1. 研究主題 生き生きと活動する子どもの育成  
ー子ども理解と明日に繋がる振り返りを通してー

2. 研究年度 三年度

## 3. 研究主題設定理由

子どもたちは日々、様々な人や興味をもったもの・ことにかかわりながら過ごす中で、何かを感じて心を動かされたり、考えをめぐらせて新たな気付きを得たり、友達と力を合わせたりして遊びや生活を豊かにしていく。そのためには、保育者が子どもの発達を的確に捉え、共通理解を図りながら子どもの興味や関心をもとに援助や環境構成に反映させいくことが必須である。これまでの研究成果として、次の保育に活かす取組や子ども理解のために、子どもの姿の共有、保育の振り返り、保育者間で意見交流することの大切さや必要性について職員一人一人が実感していることは明らかである。しかし一方で、本園は分園型の形態にあり、物理的な距離や乳児と幼児の生活リズムの違い等において、棟間での共通理解を図ることへの難しさを感じている。そこで、これまで共有するためのツールとして用いてきたドキュメンテーションの作成及び活用方法を、課題や成果を踏まえてさらに検討し、有効的に保育に循環させながら「生き生きと活動する子ども」の育成に繋げていくことができるようこの主題を設定する。

## 4. 具体的な研究内容

## ①研究のねらい

- ・子どもの見取りや保育者間での共有を通して子ども理解を深めながら、明日の保育に反映する振り返りの方法とその活用方法を見出し、援助や環境構成につなげ、保育の充実を図る。

## ②研究の重点

- ・棟内、棟間で保育を振り返る機会をいかに作りだすか、また保育者間で子ども理解を深めるための振り返りの方法や視点について探る。
- ・子どもの育ちや保育の過程をドキュメンテーションとして作成し、それを保育の自己評価、計画に活かす仕組み作りをする。
- ・ドキュメンテーションについては、保護者、園児との共有ツールとしての内容や形式、方法等について探る。

## ③活動の方法

- ・期ごとに事例作成を行い、園内事例研修にて各年齢の実践事例における子どもの思いや経験等について討議し共通理解を図る。その内容をドキュメンテーションの形式で作成し研修参加者での記録とした。
- ・子ども理解や保育の充実のため、研究における園の共通のツールとしてドキュメンテーションを用い、以下の3つの観点で取組を進めた。各事例においては、事例作成や職員間での話し合いを通しての考察を(A)「実践についての考察」(B)「保育者自身の学びや気付きについての省察」に分類した。

## 【1. 職員間での子どもの姿や遊びの共有と子ども理解の観点】

### 事例1 1歳児8月 「氷がカラカラってなるね」

保育室で氷を触って遊ぶ用意をしていると、A・B児が近づいてきた。タライから氷をとったA児は冷たさに驚いたが、保育者が「氷だよ、冷たいね」と声をかけると一緒ににこにここと笑った。B児は氷を掴もうとするが、滑ってなかなか氷を掴むことができない。「ツルツルするね」と声をかけながら様子を見守っていると、両手で氷を掴むことができ、嬉しそうに保育者に見せた。A児はカップに氷を入れて遊び始め、2つ氷を入れた時にカップの中で回ってぶつかり、カラカラと音がした。音に気付いたA児は「あっ」と驚いた顔で保育者と目を合わせ、保育者が「カラカラって音がしたね」と言いながらカップを回すと、同じように自分のカップを小さく振った。また音が聞こえて嬉しそうな表情になり、「音が鳴ったね」という保育者の応答を聞きながら繰り返しカップを振って、氷の音を楽しんでいた。

- (A) 保育室で遊んだからこそ氷の音がよく聞こえて、触る、聞く、見る…と様々な感触を楽しんでいた。感触遊びでは、扱う素材だけでなく、使う容器や活動する場所、人数等を意識することで、より一層経験することや感じるものが広がるのではないかと考える。
- (B) 子どもの経験していること、感じていることに重点を置いて普段遊びの姿を捉えたりドキュメンテーションを作成したりすることが多かった。保育者の存在や応答、アイコンタクトがあったことで安心して触ったり繰り返し試したりした姿に繋がったという意見を受けて、保育者(自分自身)との関係性も意識して遊びを捉えていきたい。

### 事例2 0歳児9月 「お山で遊んだよ」

保育室でハイハイやつかまり立ち、玩具を触ったり口元に持っていったりしながら探索活動をしていたC児。すると、保育者の『のこのこカメの子』の歌が聞こえ、つかまり立ちのまま保育者の方をじっと見ている。保育者が歌いながらハイハイでマットの山を登り、マットの上でひっくり返ったりしている様子に、C児は腰を下ろし保育者の方にハイハイで移動し、同じようにマットの山を登り始めた。保育者が「おいで、おいで」の声かけに、後についてハイハイで山を何度も登ったり下りたりして遊ぶ。途中、保育者と目が合うとニコリ笑ったり、保育者に追いつけないと甘えるような声を出したりする。「待ってるよ、おいで」と声をかけると嬉しそうに声をあげて笑い、山の上まで登り一緒に転がったりくすぐり遊びをしたりして楽しんだ。

- (A) 保育者が遊ぶ姿を見せたり一緒に経験したりすることで、子どものやってみようという思いに繋がられた。保育者に甘えたい気持ちを感じて受け止めつつ、遊びの楽しさを共有しながら、0歳児の保育者との安心できる関係性を築いていくことの大切さを改めて感じた。
- (B) 事例を書き、職員間で共有し意見を出し合うことで、子どもは何を感じているのだろう、子どもの目線に立って考える機会が増えた。また、ドキュメンテーション作成にも姿や活動の記載だけでなく、より子どもの育ちや経験の視点で作成することへの意識づけになったと感じている。

### 事例3 2歳児10月 「お風呂入ろう」

D児は「Eちゃんとお風呂入ってる。先生も一緒に入ろう。」と大きなタイヤの中に保育者を誘う。保育者は、「お風呂に入ってるの?」とイメージを共有して中に入り、「これは気持ち良くなる葉っぱ。F君も入れてくれてるねん。」のD児の言葉に、F児に「楽しみにしてるね」と声をかけた。すると、F児が「気持ちよくなる葉っぱ入れるから待っててな。」と木の葉をちぎりお風呂に入れて「気持ちいい?」と聞く。D,E児は「あ〜気持ちいい。」と答える。保育者はD,E児に「気持ちいいね」と共感しつつ、F児がイメージをもってD,E児と一緒に遊べるよう「F君も一緒に入ろうよ。」と誘いかけたが「気持ちよくなる葉っぱ取ってるから入らない。」というF児。保育者は葉っぱを取ってちぎったりお風呂に入れたりして楽しむF児の姿を見守る。しばらくするとD,E児は一緒にその場を離れたが、F児は「先生気持ちいい?もっと入れてあげる。」など保育者とやり取りをしながら繰り返しお風呂に葉っぱを入れることを楽しんでいた。

- (A) 友達との関わりが少ないF児が、友達とイメージを共有しながら一緒に遊ぶ機会と捉えて関わったが、仲立ちをする中で本児がしたい遊びへの思いに気づき、共通のお風呂のイメージでつなぎつつ、F児の思いを受けとめ関わって遊ぶことで、D,E児が場を離れた後も引き続き遊びを楽しむ姿に繋がった。個々の遊びの読み取りを大切にし、一人一人が何を楽しんでいるか見極め、それに応じた援助をしていきたい。
- (B) 事例やドキュメンテーションの作成から、子どもの姿や思いに応じた援助(共感、代弁、見守り、仲立ち等)ができていたか振り返ることができた。また、他の保育者と思いや考えを共有することで、子どもの思いの捉えや援助・環境構成への考え方、方法についての幅(視野)が広がり、今後の実践に繋がる学びとなった。

#### 事例4 4歳児11月 「骨のパズルみたい」

園庭や花壇の石や枝を恐竜の化石に見立て、化石探しをしている。G児とH児、I児が手押し車や熊手など必要な道具を用意して化石を探している。I児「恐竜の化石あったで」H児「ここにもある」G児「これは歯の部分やな」など言いながら手押し車に集めている。テラスに図鑑を見に行くと、同じく化石探しをしていたJ児とK児が「汚れてるから洗いたい」と言い、全員で石や枝を洗ってタオルで拭いている。I児が石や枝を恐竜の形になるように並べ、K児が図鑑と見比べている。その横でJ児が図鑑を広げ、載っている恐竜の上に石や枝を乗せて「ティラノサウルスできた。恐竜を組み立ててみた」と言っている。G児は「これはスピノサウルスの化石や」と言い、I児と図鑑を見ながらつくり、できあがるとG児「恐竜の本見たら組み立てれた」I児「骨のパズルみたい」と言い、満足そうに見ている。

- (A) 図鑑があることで、集めた石や枝をどの恐竜のどの部分なのか照らし合わせることが出来た。また、友達とのイメージの共有には図鑑など視覚的なものがあることでより共有しやすいと考える。
- (B) 園内事例研修を全職員で行うことで、教育時間と長時間それぞれの保育内容や一日を通した子どもの姿の情報交換の場となり、新たな子どもの姿の発見や気づきにつながった。また、事例から子どもの感じたことや気づきなどを読み取り、その期の発達を確認したり、保育者が伝えたいことを考えたりしながらドキュメンテーションを作成した。これは、保育者間での子ども理解を共有するきっかけになり、自身の保育の振り返りの機会となった。

## 【2. ドキュメント作成方法の工夫の観点】

#### 事例5 5歳児9月「どうしたらコースが壊れないかな？」

トイを使っての水流しでは、曲がり角のコースをつくると、水が流れるとすぐに壊れてしまうことがあった。その場にいる友達同士でも話をして工夫したり試したりする姿はあったが、解決することが難しかった。実際に遊んでいる様子を動画や写真に撮り、その日の遊びの振り返りではテレビの大きい画面を見ながら、どうしたら曲がり角が壊れないかをみんなで考えることにした。「もっと洗濯ばさみを増やしてみたら?」「水を流すのをホースと違うものにして、ゆっくり水を流す」など、違う遊びをしていた友達も写真を見ながらアイデアを出す姿があった。また、写真をホワイトボードに掲示しておいたことでその後も見ながら友達同士で話をしていた。

- (A) 振り返りの時に実際の写真があることで、その場で遊んでいなかった子どもも遊びの様子が分かり、いろいろなアイデアが出てきて、次の日の遊びに繋がっていた。実際に遊びを進めていた子どもたちも、写真や動画があることで工夫したことや難しかったことなどを思い出しながら言葉にして伝える姿が増えた。継続して取り組んできたことで、友達のしていることに興味を持ったり、一緒に考えたりする機会になっている。
- (B) 遊びの振り返りをしながらドキュメンテーションをつくることで、保育者自身の遊びの振り返りや記録にもなり、環境構成などにも繋がるようになった。

### 【3. 保護者啓発の観点】

#### 事例6 3歳児7月

7月になり水の冷たさを喜んで遊んでいた。水遊びを色々な形で楽しめるよう水を入れた傘袋を用意した。傘袋を地面に引きずって「へびのお散歩」、手で掴んで「ポヨンポヨン」、足で踏んで「柔らかい」と、感触にも興味をもち嬉しそうに繰り返し触れていた。また、袋の中で水が動く様子や傘袋の形の変化に面白さを感じて注目する姿もあった。さらに、偶然袋に開いた穴から水が飛び出す様子に驚き、「(袋を)ほしい」と自分でもやってみようという思いが生まれた。穴を開けようとするがなかなか袋が破れないことで、水を出したい思いがどんどん膨らみ、両手で強く挟んだり叩いたり、踏んだり噛んだり、思いつくままに次々やってみる姿があった。

(保育者の取組)

後日、この姿をドキュメンテーションにして保護者に伝えることにした。子どもたちが夢中で遊んでいる時、言葉にはなっていないが表情や仕草からくみ取れるその瞬間、瞬間の気持ちや心の動きなどを、実際のつぶやきに加えて吹き出しという形で書き入れ、楽しんでいることや自分なりにやってみようとしている姿を伝えた。また、遊びを通じた経験も順序立てて書き出し、保育者の思い(ねらい)を加えた。

- (A)水遊びを楽しむ中、傘袋という新しいものが出てきて保育者が触れて見せることで興味をもっていた。手や足で冷たさや柔らかさなどの感触に気付き、気持ちよさや面白さを感じて繰り返し触れる姿があった。また、水が袋に入ること、その動きの変化が目に見えてわかりやすくなったことで、新たな興味へと繋がった。
- (B)3歳児にとって、園での出来事を自分の言葉で伝えるのは難しさがある。そこで、ドキュメンテーションという形で遊びの様子や興味、経験を保護者に知らせることにより、家庭における会話のきっかけにして欲しいと考えている。また、それは保護者にとって安心になり、園生活への関心・理解によってより良い連携へ繋がると考える。

### 5. 研究の成果

- ・日常的にドキュメンテーションの作成や事例研修を行い、保育や子どもの姿を振り返ってきた。作成については、保育者独自の工夫や効率的かつ効果的な方法を試行しながら、習慣化、定着化されつつある。また、保育の具体的な記録となり、環境や援助の在り方を見直し、実践する際により明確に意識したり、保育計画に活かしたりすることにも繋がった。
- ・子どもの姿を捉えるにあたっては、子どもの目線に立ったり、保育者との関係性を意識したりする等、様々な視点から考えることの重要性を再認識した。さらに、1人1人の異なる育ちの理解、興味や発達段階を的確に読みとろうとする力や、活動に込めたねらいや生き生きとした子どもの姿が伝わるように表現する方法、伝える力が磨かれ、保育者の資質向上に繋がった。
- ・話し合うことで必然的にクラスの実態を共有できるため、他の保育者の考え方を取り入れたり相談しあったりして、適切な環境や援助について考える機会となった。棟内での共通理解、保育者間のコミュニケーションが円滑になり、更に幼児棟では教育時間と長時間の子どもの情報交換の場となるなど、各棟で共通理解し連携をとりながら保育することにも繋がった。

### 6. 今後の課題

- ・事例研修などで議論しあう機会だけにとどまらず、日常的にドキュメンテーション作成時に、保育者間で意見交流や会話の機会、共有・共感の機会が積み重ねていけるような職員集団を目指し、園内(棟内)での子ども理解の機会の習慣化、そして保育の質の向上を図っていききたい。棟間については、資料提供以外での相互の保育の共有方法も検討の余地があると考えている。
- ・保護者啓発としてのドキュメンテーションは、その作成時に遊びのねらいや伝えたいことを意識して作成するものの、保護者が読みやすい分量やバランスが難しい。“遊び”そのもの、子どもの“姿”、“環境”等、重点を置くところを考え、さらにわかりやすく伝える努力をしていきたい。また、家庭での子どもとのコミュニケーションツールとしての役割や園の保育・教育の理解推進といった、園と家庭との繋がりについては具体的に捉えることができていない。アンケートや懇談会等、保護者の声を聞くことも視野に入れ、今後の課題としていきたい